「家康に古典の素養」

みらい学会 静岡で講演 和歌との関わり紹介

徳川みらい学会第5回講演会（同学会、静岡商工会議所主催）が14日、静岡市葵区のしずぎんホールユーフォニアで開かれた。同市出身の歌人田中章義さんが「徳川家康公の和歌」と題して講演した。

田中さんは家康が詠んだとされ、同区の安西寺に歌碑が建立されている「松高き 丸山寺の 流の井 幾歳（いくとせ）すめる 秋の夜の月」の和歌を紹介。井戸の水に月が映っている情景を表現し、「すめる」は月が「住む」と水が「澄む」の掛け言葉となっていると説明した。

家康が少年時代に人質生活を送った駿府の領主・今川氏は京文化を保護したことで知られ、田中さんは家康と和歌の関わりはこの頃からあったのではないかと指摘。その上で「水面に映った月を『住んでいる』としたのは、家康に古典の素養があったからこそ。もっと注目するべき」と語った。

（社会部・石岡美来）

徳川家康と和歌の関わりについて語る田中章義さん＝14日午後、静岡市葵区のしずぎんホールユーフォニア

静岡新聞

© 静岡新聞社　無断複製転載を禁じます